

辭をもてす、汝此ことばをきく時は、我手に死すとも、みづからたれりとせよ

〔關の秋風〕蚊てふ虫もにくさは劣るべくもあらず、夏の夕涼しさにはしゐして、笛のしやうかな  
んどいへば、はや其聲をしるべに飛來りて、己が名呼ぶ聲いとうるさし、蚊やりふすぶれど、煙薄  
きほどは、猶立さらず、人もたへかぬる頃、かれもしばし立行侍るを、其隙を得て、帳打たれつ、今  
宵は安くいぬべかめるとおもふ内、耳のあたりに聲して、枕のあたりさらぬぞいとにくし、紙燭  
もて焼殺してんと思へば、起あがるほどのわびしければ、人呼出して焼蓋せよといへば、しそく  
持ありくま、に、ほかげの目にてりて、ねむさいとたへがたし、顔にとまりてさすを、はやり打に  
うてば、多くもらしつ、腹ふくる、ばかり吸せてうてば、血うち散りて穢らはした、手と足のう  
らさしたらんは、かゆさもそことさすべうもなく、ひたかきにかきてもあたらすいとくるし、晝  
の程も調度ならべおくかたはらより、忍びやかに出て害ふのみ、足に白き斑ありて、全體黒くた  
くまし、秋の末つかたや、夜寒の頃、この虫も夏の程の年わかくわざ勝れたる心にて、ひたすら  
打とまりてさせども吸ども、おのが口はし、七つ八つにさけたれば、心ばかりにて、わざおとりす  
るぞ愚なる、

〔堀川院御時百首和歌夏〕蚊遣火

大江朝臣匡房卿

す、たる、宿にふすぶる蚊遣火の煙は遠になびけとぞおもふ

〔續千載和歌集夏三〕蚊やり火を

前大納言爲家

蚊やり火の下やすからぬ煙こそあたりのやども猶くるしけれ

〔倭名類聚抄十九〕蠶

蔣鮎切韻云、蠶

音魯、和美、加良、名

井水中小虫也

〔箋注倭名類聚抄八名〕

蠶字諸書無見、按說文、

蛸、

蛸、

蛸、

蛸、

蛸、

一名子子、與此略同、疑蠶是蛸字之訛、則知今俗呼棒振者也、王引之曰、蛸、